

——秋重義治氏追悼記——

秋重義治先生のご逝去を悼む

中 村 昭 之

先生は、昭和54年11月3～4日鹿児島大学でおこなわれた九州心理学会に御出席になり発表された。その折九州各地から集まった先生のかつての弟子達や年来の知己とも親しく歓談する機会を持たれた。その後11月10日福岡市、曹洞宗東林寺において先生永年の念願としておられた得度式をお受けになり、晴れて沙門としての第一歩を踏まれることになった。しかるにその僅か3日後、昭和54年11月13日午後2時45分、急性心不全のため福岡県甘木市三奈木の先生の御生家において、全く突然その75歳の御生涯を閉じられた。数日前までどのように御壮健に活躍されていた先生の御姿に接していただけに、この訃報は門下生をはじめ、先生を知るすべての人に大きな衝撃を与え、深い悲しみの淵におとし入れた。門下生の一人としてここに先生の御業績を偲び、追悼の意を表したいと思う。

先生は明治37年、福岡県南部の天満宮で有名な大宰府の近くに位置する、田園都市、甘木で生まれられた。生家は代々医家であり、当時、東京大学哲学教授井上哲次郎博士を叔父に持つ先生の御家庭は大変恵まれた教育的環境にあったと思われる。旧制佐賀高等学校より九州帝国大学に入学されたが、当時の九大心理学教室は、佐久間鼎教授、矢田部達郎教授といった、日本を代表する二人の学者を擁していた時期で、先生はこの御二人の先生に師事され研鑽を積まれた。その後は、昭和9年九州帝国大学講師、同19年助教授、同25年教授とすすまれ、同43年定年退職されるまで34年間、九大で教鞭をとられた。この間昭和35年より同42年まで三期にわたって、日本学術会議会員になられ、二度の欧米諸国の研究機関の歴訪視察をふくめて、長期研究計画委員として意欲的な活動を行なわれた。九大退職後は直ちに駒沢大学教授に招聘され、同大学大学院の設立・充実のため、鋭意努力を傾倒されてこられた。この間、昭和49年に日本応用心理学会名誉会員、同50年勲三等旭日中授章を受けられ、同53年日本心理学会名誉会員になられた。

先生の御研究は大別すると二つの領域から成立している。第一の研究領域の主題は、知覚の恒常性を中心とした認識の研究である。先生のこの研究は世界的に令名が高く、1961年にアメリカ合衆国最大の研究所である、

National Institute of Health に招かれて講演、ついで1963年には、ソ連邦最高の学術機関誌、教育科学アカデミア誌上にその詳細が記載され、1966年にはモスクワでの第18回国際心理学会議において、シンポジウム“Perception of space and time”に招待講演者として出席された。先生はその知覚恒常現象の研究でそれが群論にいう群の構造を有すること並びにすべての恒常現象を統一的に包摂する基本的変換公式と情報量保存の法則が存在することを明確にし、時々刻々変化する内外のエネルギー変化に対して、それらの公式と法則が作用して、恒常に安定した知覚世界が成立すると説かれた。先生の第二の研究領域の主題は禅の心理学的研究（調身・調息・調心に関する心理学的研究）であるが、この研究も上述の公式・法則に密接に関連している。つまり、その公式と法則は単に知覚現象にとどまらず、その相関者である、主体としての自己にまで普遍化される。それは「自己の恒常性」と呼ばれるが、そこでは、知覚における基本的変換公式の代りに「無所求の法則」が情報量保存の法則の代りに「価値量保存の法則」が作用する。自己の恒常性は、典型的には、「無所求の法則」が支配する“さとりの”世界にみられるが、それは、環境が時々刻々どのように変化しようとも、一貫して、不増不減不垢不浄不生不滅の価値量保存の法則が作用している世界であると説かれる。

大乘仏教では肯定を否定し、否定を否定しその結果、両否は両是に転換されるという。排中律を逆転した容中律の立場に立つと言われるが、先生はこの立場を更に展開され、さとりの世界の論理構造を五つの公理(命題)によって構成し、それを脱落の論理(ペンタ・レンマ)と名付けられた。すなわち、公理(一)は、否定にして且つ肯定である命題。公理(二)は、肯定にして且つ否定である命題。公理(三)は、否定のみの命題。公理(四)は肯定のみの命題。公理(五)は両否両是を表わす命題である。公理(一)と(二)の関係は仏教語では、相即とか回互と呼ばれる。公理(三)と(四)の関係は相入とか不回互と呼ばれるものである。先生は、正法眼蔵の各巻、永平広録、学道用心集、仏祖正伝菩薩戒教授文などの論理構造を詳細に探求され、これらの中に見られる禅の悟りの世界は、上述の公理系によって剩すところなく完全に表現され更に他の公理を必要としないと述べておられる。

先生の御指導の下におこなわれ“調身・調息・調心に

関する心理学的研究”は、先生御自身の研究をふくめて約 260 題の多きに達する。これらの研究の成果は、国内のみならず、国外の学者の注目するところとなり、1980 年ライブツィヒで開催される第22回国際心理学会議において

“ Psychologic of Nirvana, Zen Therapy and Peace in the World ” というテーマで、特別講演者として招聘が決定されていたが、突然の御逝去によってそれが実現できなかったことは、かえすがえすも残念なことである。

先生の業績を振りかえる時、その偉大な研究の足蹟に

あらためて畏敬の念を禁じ得ないが、永年身近にいた私にとっては、私生活においても学究のあるべき姿を示された人生の師でもあった。学問へのあくなき情熱は年と共に いささかも 衰えることなく、一切を研究に 捧げられ、その御日常の生活は簡素できびしく、禅僧の生活を思わしめるものであった。先生にとっては生きることが即研究することであった。その御生涯を思うとき肅然として身のひきしまるのを覚えるが再び先生の訾咳に接することはできない。謹しんで哀悼の意を表し御冥福を祈りたい。

(昭和55年 1 月記)